

B-27 アイロンによる「てかり」について
郡山女子大学 〇川股浩 名原いづみ

目的 衣服の価値を著しく損なうものには、「てかり」がある。これには布が種々の表面摩擦によって発生する「摩擦光り」、アイロンがけによる「アイロン光り」、油脂附着による「汚れ光り」、などがある。本報では、薄地化学繊維の梨地織物がアイロンによる「てかり」の発生がしやすいことから、アイロン荷重、温度との因子を取りあげ、「てかり」の発生した織物の繊維の形態を顕微鏡的手法を用いて観察し、合わせて「てかり」の光沢を測定し、アイロン荷重、温度の影響を検討した。

方法 試料布には、アセテート、プロミックス、加エ糸梨地織物、色相黒、割り縫いした試料に温度5段階、荷重4段階で「てかり」を発生させ、表面を光学顕微鏡、及び、走査型電顕により観察した「てかり」の反射光量を、自記変角光度計、顕微光沢計により測定した。

結果 SEMで観察した結果、アイロン温度、荷重が大きくなると繊維表面が溶融し、繊維同志が接着している部分、*crack* ができている部分が観察された。織物の厚みも減少し、表面が平坦化し、反射光量も増化する。